

「心を繋ぐテニスの架け橋」

四街道市立旭中学校3年

宮崎 望



夢を見ました。夢の中でタイ人の女の子達が微笑んでいました。家の近くの友達でもなく、同じ学校の友達でもありません。私の好きなスポーツ、硬式テニスを通じて得た友の顔です。

先月遠征試合で訪れたタイは、気温四十度。灼熱の太陽がふりそそぐテニスコートは、四十五度にもなります。テニスコートのネットの向こうに、彼女は立っています。彼女の強烈なショットに、私はなんとかくらいついていこうと、必死にボールを追いかけていましたが、足もつれ追いつけず、彼女の力の前に敗れてしまいました。悔しさでふてくされて私に、彼女は、真っ黒に日焼けした顔に白い歯を見せて、

「ナイスファイト！ア・リ・ガ・ト・ウ。」
と、片言の日本語を交えながら、ネットの向こう側から

手をさし出して、にっこりと微笑みかけてくれました。自分のことしか考えていなかった私は、彼女のさわやかな性格の前に、自分の小ささを感じました。そして、自分のテニスが認めてもらえたこと、必死にコートを駆けずり回って試合したことに、感謝してくれたことが嬉しく思いました。しつかりと握手をした私は、もう対戦相手ではなく、国と言葉を超えた友達になっていました。

片言の日本語と英語、タイ語の入り交ったコミュニケーションが始まりました。彼女は私と同じ歳。彼女は毎日話しかけてくれました。私達の会話に彼女の友達も加わり、一緒に練習や試合をしたり、ご飯を食べたり、恋人の話をしたり……。私達は友達であり、時にライバルでもありました。少し複雑な関係ですが、こういう所からフェアプレーの精神が生まれるのではないかとも思いました。そして何より、テニスをする事がとても楽しく感じました。決して上手に言葉が使えるわけではありませんが、お互いがボールを打ってテニスをする事で、何か繋がついている気がして、言葉など関係ありませんでした。テニスが、私達の心を繋いでくれました。

私は五歳の時に、テニスに出会いました。場所は、この夏彼女と会ったタイのバンコクでした。タイ人のコーチに、片言の日本語とタイ語でテニスを教えてもらいました。見よう見まねで覚えたテニス。今でも、コーチの打つボールから、「もっと強く！思いきって！」という力強い気持ちが伝わってきたのを覚えています。そしてこ

それが、私のテニスの原点となりました。

その後、日本に帰国した後もクラブチームに所属し、テニスが続けます。同じ日本人同士でもテニスをしながら、心で会話している自分に気がつきません。勝負の世界のはずなのに、不思議な気持ちです。

第二の故郷でもあるタイの試合会場は、私にとって特別な場所でした。その中で、私は、忘れることのない大切な友を得ることができました。しかし今、連絡をとり合うことはできません。連絡先を知らないからです。でも、いつか必ず会えると確信しています。お互いに認め合い、一緒に過ごした時の、心の繋がりを今も覚えているからです。

五年という時を経た今も、コーチの、強くなれ！強くなれ！という思いのこもったボールが、壁にぶつかった時の支えになっています。テニスを通して、お互いに国や言葉を超えて純粹に繋がりたいという意志から生まれた強い友情と、テニスという、国境のない世界共通のスポーツを愛する心を学んだことが、これからの私の勇気の源です。

心を繋ぐテニスの架け橋を胸に、これからも私はボールを追い続けます。